

切になる類、各工夫して仕出したるにはあらず、思ひよらぬ事が始となりたるなるべし、古人のなせし事は、後世のための故事となるも亦その如し、

〔本朝文鑑七〕蕎麥切頌

二竹堂

むかしは蕎麥の花の解つくりて、先はその名のひゞきよりそばにそひ寐の花もさかば、色すこし黒からんにもと、あだなる言葉の色にめでしも、今はその花の實をほめて、切といふ字をそへたらんに、あつはれ武士の喰物にして、あま茶の男はかく事も得ざらん、さてこそ先祖ばせをの翁も、我家の俳諧の都にうつらぬは、そば切の汁のあまさにもゑるべし、山葵のからみのへつらへるにやとは、俳諧のみにもあらず、蕎麥切のみにもあらず、儒佛一貫の風味をいへるならん、  
まかも文道の頌をいへば、白紙が文集には、その花を詠じ、李公が本艸には、その實を稱す、されど我朝の歌人達は、大かた都そだちなれば、蕎麥切の歌はなきとやらん、さるを西行の心には、秀衡が馳走のそばの歌を、其世の撰集にえらばれずとて、うらみて道より歸られしとや、これらは莊子などの寓言に似たれど、今の風雅のへつらへる人を云らん、そも蕎麥切の旗下には、一將を得て、万夫の勇ありとや、鎧の袖もさくらさく花。鯉。を始として、陳。皮。の六郎も、唐。辛。の入道も、栗。姜。を二手にわけ、本より大根の下知をまつに、木曾は雪吹の頬をそぐよりもはげしく、伊吹は山おろしの鼻をもぐに殊ならず、まがるを海。苔。といふ物の能登の國には、黒のりといひ、伊勢の國には、青のりといひ、其外國々の海苔はあれど、すはといふ時の間にあはねば、ある時もあり、なき時もあるべし、爰に葦ヒトコといふ物は、源氏の品定にも出ながら、梵網の戒經には、きははれて、あれの是のと名にたちしより、春はあさつきとも、かりきとも、冬はねぎとも、ねぶかとも、四季おりくの名をかふれども、表むきには名をだによばず、かの物は、なごいひあへれば、久米の皿山に一城をかまへて、懇望の人には、その香を發す、いはゞ孔明が草廬の名をかくして、その字も艸冠に軍